

特 集

内 因 性 精 神 病 の 疾 病 論

第 63 回日本精神神経学会総会シンポジウム*

□ はじめに □

司 会 村 上 仁

ではさつそく本日の午前中のシンポジウムをこれから開催させていただきます。このシンポジウムのテーマは「内因性精神病の疾病論、ノソロジー、ことに精神分裂病を中心にして」というのでありまして、これはわれわれ臨床精神医学を専攻する者にとつてもつとも関心のある大きい問題であり、しかも現在でもいまなお十分に解決されていない問題であります。まず分裂病の疾病論とは何かということですが、結局それは分裂病が一つの疾患単位 (Krankheitsinheit) なのか、あるいはいろいろな疾患の疾患群であるのか、つまり E. Bleuler のいわゆる分裂病群 (Gruppen der Schizophrenien) といったものであるのか、あるいはまた単なる Syndrom にすぎないのか、そういうことが問題の中心になるのではないかと思います。

そしてまた内因性精神病が一定の疾患あるいは

疾患群であるとしても、それがどういう本質のものであるか、どのような疾患または疾患群であるのか、そういうことが問題にされなければなりません。この点につきましては、臨床遺伝学の立場から井上教授が、臨床的観察の立場から黒沢教授が、あるいは広い意味での病因論的立場から島崎教授がくわしくお話になると思います。しかしこういう問題が現在でもはつきりまだ解決されていないということのいちばん大きな原因は、内因性精神病、ことに分裂病においてまだはつきりした身体的基礎 (Somatic base) が明らかになつていないということにあるのではないかと考えます。

この意味におきまして、立津教授が分裂病脳の組織病理学的な検索により、分裂病には一定の特徴的な所見があるということを主張されておりますのは、われわれにとつてもたいへん興味あることでありまして、本日このシンポジウムの最初に先生のお話を聞かせていただけるのは、非常に意義あることと存ずるしだいでございます。ではお願いいたします。



写 真

司 会 村 上 仁 氏 (京都大学精神科)

* 第1全体集会, 1966年4月7日 於: 東京国立教育会館